

盛土遺構の性格－釧路市大楽毛1遺跡を例に－

高橋 勇 人

Character of piled soil remains – Otanosike-1 site in Kushiro city are taken for an example –

Hayato TAKAHASHI^{*}

1. はじめに

盛土遺構とは、地表面から掘り込まれて構築される竪穴式住居・土坑などとは異なり、掘削された土を盛り上げて形成された遺構を指す。その空間の存在はあらかじめ住居跡などと配置が考慮に入れられており、住居跡とともに共存している。こうした盛土の例は釧路地方では本稿で取り上げる釧路市大楽毛1遺跡（松田猛・石川朗2001、石川朗2002）のほか、釧路地方では標茶町茅沼遺跡群（豊原熙司ほか1979）の中で報告されている茅沼遺跡第2地点や、同じく標茶町開運町遺跡（豊原熙司ほか1983）などが知られている。一般的に盛土には、単純に住居跡の掘り上げ土のみを盛土とは区別して、その盛土空間に何らかの作業空間がうかがえる盛土についてその性格の一端を、大楽毛1遺跡で報告されている盛土遺構を例にとって考えてみたと思う。

2. 釧路市大楽毛1遺跡

釧路市大楽毛1遺跡は、釧路市中心部より西方、釧路湿原の西側丘陵の南端に位置する遺跡である。現在では釧路川から独立した流路をとっている阿寒川に面している。阿寒川は、以前は河口付近で釧路川と合流し、太平洋へ注いでいた釧路川の支流の一つであったが、現在では釧路川から独立している。大楽毛1遺跡はその阿寒川の支流、小河川である大楽毛川沿いに面しており、この大楽毛川の流路に面した丘陵上には、大楽毛2～5遺跡が大楽毛1遺跡の北側に存在する。

大楽毛1遺跡はかつて大楽毛遺跡とも呼称され、昭和30年代から数次にわたり発掘調査が行われていた。しかし、当時すでに土砂採取などにより、丘陵が失われており、より海岸に面した遺跡の様子は窺い知ることはできなかったようである。それでも数次にわたる発掘調査の成果として、土器・石器などの遺物が採集され、現在、釧路市埋蔵文化財調査センターに保管されている。

平成11年には、一般国道38号線釧路新道工事に伴い、釧路市教育委員会が発掘調査を実施した。5,000㎡に及ぶその調査では、住居跡14軒をはじめ、本稿で取り上げる盛土についても21箇所を数えた。出土遺物は総数で18,569点を数え、土器に関しては北筒式が出土量の8割

※釧路市立博物館（Kushiro City Museum, Kushiro Hokkaido, 085-0822）

近くを占めている。

平成13年には、平成11年度の調査地区の東側に隣接する1,000㎡の範囲で発掘調査が行われた。結果として、竪穴住居跡は2軒確認された。このうちの1軒は、平成11年度の調査時で調査地区の東端に1部かかる状態で、土坑と報告されていたが、平成13年度の調査で住居跡の一部が見えていた状態であることが判明している。さらに土坑が9基、焼土24箇所、盛土が2箇所報告されている。盛土の2箇所とも、平成11年度の発掘調査段階ですでに東側に、すなわち平成13年度の調査範囲に伸びていくことが確認されており、両年度をあわせた調査で確認された盛土は21箇所、ということになる。

平成13年度の調査で遺物は、6,999点を数える。2箇所の盛土からの出土が約半数にのぼり、他遺構と比較して盛土からの出土が多い傾向は、平成11年度の調査結果と同様である。出土した土器の主体は北筒Ⅱ～Ⅲ式とされる土器であり、両年度の調査地区においては盛土を伴う縄文中期後半の遺構が中心となっている遺跡であることが言えよう。

3. 盛土遺構

筆者は釧路市大楽毛1遺跡の平成11年度調査で報告された盛土遺構については一度紹介している（高橋2002）。その中で、標茶町茅沼遺跡第2地点や、同じく標茶町開運町遺跡で報告されている盛土と似た形態の盛土について明確に盛土遺構として紹介したが、当時全体が確認されていなかった盛土については紹介を控えた。報告書中の呼称をそのまま使用することにするが、盛土Cがこれに該当する。平成13年度の調査で全体像が把握できたので、改めて紹介したいと思う（図2および図3）。

①盛土C

形態は不整形に北西から南東に広がりを見せる。5m×5mのグリッドにして、実に37のグリッドにわたり分布している。層厚の違いはあろうが、盛土A、盛土Bより平面的な広さは圧倒的である。その割りに周囲に存在する住居跡は盛土A、盛土Bと比較すると少ない。わずかに2軒、やや離れた位置に1軒といった程度である。盛土の周囲に存在する住居跡の数は4～8軒程度を考えていたが、訂正しなければならないようである。

盛土A・盛土Bとの共通点は焼土の多さにある。報告書の記述には、層位的には、盛土Cの構築後というより、むしろその直前に位置する焼土が多いとあるが、盛土Bなどでは盛土の上部と下部で接合する土器の資料が報告されており、その点から考えてみても盛土自体の構築時間がさほど長くないことがうかがえ、層位的には盛土構築直前に位置する焼土も盛土遺構を構成する基盤となるものであるかもしれない。つまり、焼土が多数残されるほど常時的に作業空間として考えられているスペースに盛土遺構は形成されていくのであろうか。

②焼土を伴う盛土

大楽毛1遺跡で確認された盛土のうち、焼土を伴う盛土を見てみることにする。以前紹介した盛土A・盛土Bについては省略することにしたい。

盛土Gは平面範囲で7.40m×5.50m、最大の層厚は0.15mと小規模であるが、焼土を4箇所、ベンガラの広がりをもつ。周囲に土坑は点在するものの、近くに住居跡の存在はない。しかし、この遺構は調査地区の南端に位置しており、土砂採取などにより消滅してしまった南側の部分に盛土に関係する遺構の存在があった可能性がある。

盛土Pは平面の規模が9.00m×7.50m。最大層厚は0.35m程度で、やはり前述の盛土A・盛土B・盛土Cなどと比較すると小規模であるが、この盛土が位置する沢地形の上部にやはり焼土を伴う盛土Q、さらに上部に盛土Sが連続して広がりをもっている。この3遺構をあわせると、盛土Aと同規模の広がりを持つ。周辺に住居跡はないが、これらの盛土のまわりに土坑が数基存在する。

さらに小規模であるが、焼土を伴う盛土に盛土Hがある。この遺構は平面規模はわずかに3.60m×2.80m、しかも住居跡に盛土自体が切られている。ただ、焼土が1基付属しており、焼土を伴う盛土の定義にはあてはまる。また、盛土の範囲に入っていないが、この遺構の北側から東側にかけて、近距離に焼土が3箇所確認されている。

4. 盛土遺構の性格

平面規模の大小はひとまず考えないことにして、焼土の伴う盛土遺構の役割を考えていくことにしたい。まず、標茶町茅沼遺跡第2地点、同じく標茶町開運町遺跡などの盛土遺構に関係する住居跡は内部に炉を持たない形態の住居がほとんどであった。それにたいし、大楽毛1遺跡の住居跡は内部に炉が確認されている。そのような違いはあるにせよ、焼土の多さを鑑みるに屋外炉の機能を持っていることは否定できないように思える。加えて、盛土Aに関しては盛土の上面で柱穴と思われる小ピットが確認されている。何らかの上屋構造があったと見るのが妥当であり、屋外炉を後押しの理由になるかもしれない。ただ、盛土Aの上面の焼土は、木炭の出土状況か

ら考えてもその上屋の構造物が焼失した時の焼土の可能性もあり、一概に片付けることはできない。

盛土は炉だけの役割であるのだろうか。さすがにその目的のみで盛土を構築するわけではないだろう。盛土からの遺物の出土量の多さ、さらに黒曜石フレイク・チップの多さを考えてみると、土器・石器製作の作業的空間としての役割が指摘されるようである。報告書には、「住居外でおこなわれた石器生産、廃棄といった諸活動を集約的に保管する場としての機能が強い」とあり、おそらくはそうした一般的な生産活動の工房といった性格づけが可能ではないだろうか。その過程の中である程度整地の必要も含まれていた、とするのはいささか飛躍的すぎるであろうか。

ベンガラが存在理由について、2001年度の報告書中には、「(ベンガラを撒くことが) 釧路地域では縄文早期からの伝統を引いている可能性がある」として、祭祀的な側面を強調することを妥当としていないようである。

盛土Hのような規模が小さな盛土は、住居跡で切られていることから、盛土が大きく形成される前に空間配置が変化したと考えられる。多少の時間差はあるにせよ、盛土Hが住居跡に切られており、その住居跡は盛土Aの盛土遺構の空間配置に完全に組み込まれていることからうかがい知ることができよう。いずれにせよ規模の大小の違いはあれ、盛土の遺構自体が住居を建てる時点であらかじめ空間配置に置かれていることは間違いない。

5. 盛土を形成する土の供給について

堅穴式住居は地表面から土を掘り込んで構築される住居である。したがって、ある程度の掘り上げ土は当然存在するわけであるが、その掘り上げ土のみでは平面的な広がりを考えて盛土を構成するのは難しいのではないだろうか。盛土Aなどのような比較的短期間といっても、ベンガラが数次にわたって撒かれていることは、土を一度盛られてから期間を置いてまた土を盛るわけである。一度に掘り上げた住居跡の土を何回かに分けて盛っているというのは、その期間中の掘り上げ土の保管についての観点からも可能性が低いと思われる。やはり、土を追加して盛る必要ができた段階で掘削してきたのではないだろうか。

土の絶対的な量にしても少し足りない印象を受ける。盛土を供給する痕跡として、報告書中では不整形に掘削されている土坑の存在を指摘している。15号土坑がそれに該当するであろうか。

15号土坑の規模は、6.86m×6.44m、最深部の深さは0.82mである。しかし平面の形もいくつか楕円を組み合わせたような不整形であり、床面も不規則に傾斜したり、部分的に深く掘り込まれている。このような土坑の存在は盛土に土を供給する目的として出現した可能性があるとしている。盛土の土はいわゆるローム層まで掘り込んだ黄褐色の土を素材にしているものが多く、そうすると、



図1 釧路市大楽毛1遺跡 位置図および調査範囲図
他の土坑でローム層まで深く掘りこまれており、形態が非常にいびつな土坑は、盛土を供給する遺構である、という可能性が指摘できるのであろうか。

縄文時代中期後半の遺構は、住居跡も一段、段を持つものなど、不規則な形をしているものが多く、土坑にいたっては形を表現すること自体難しいプランを持つものが多い。これらの土の供給システムの解明も盛土遺構の解明につながると思われる。

6. おわりに

釧路市大楽毛1遺跡の盛土遺構を、住居跡の空間配置の構成、さらに盛土を供給する土坑の可能性を紹介してみた。釧路地方で北筒式に伴う盛土遺構の解明には、大楽毛1遺跡のように、盛土と住居跡の空間配置がうかが

える遺跡からさらに資料が追加されていく必要がある。道南で見られるような縄文後期の巨大な盛土遺構とも対比しながら、盛土遺構について考察をすすめる必要がある。

7. 引用・参考文献

- 釧路市立郷土博物館 1965『昭和39年度事業報告』
- 釧路市立郷土博物館々報No.157・158合併号
- 釧路市立郷土博物館 1967『博物館実施行事報告』
- 釧路市立郷土博物館々報No.186・187・188合併号
- 豊原照司ほか 1979『茅沼遺跡群』標茶町教育委員会
- 豊原照司ほか 1980『茅沼遺跡群Ⅱ』標茶町教育委員会
- 豊原照司ほか 1983『開運町遺跡』標茶町教育委員会
- 西 幸隆 1998「標茶町の先史時代」『標茶町史』 第



図2 盛土C範囲図（報告書より作成）

一巻通史編 標茶町

松田猛・石川朗 2001『釧路市大楽毛1遺跡発掘調査報告書』 釧路市埋蔵文化財調査センター

石川朗 2002『釧路市大楽毛1遺跡調査報告書Ⅱ』 釧路市埋蔵文化財調査センター

高橋勇人 2002「釧路市大楽毛1遺跡の盛土遺構」『釧路市立博物館紀要 第26輯』

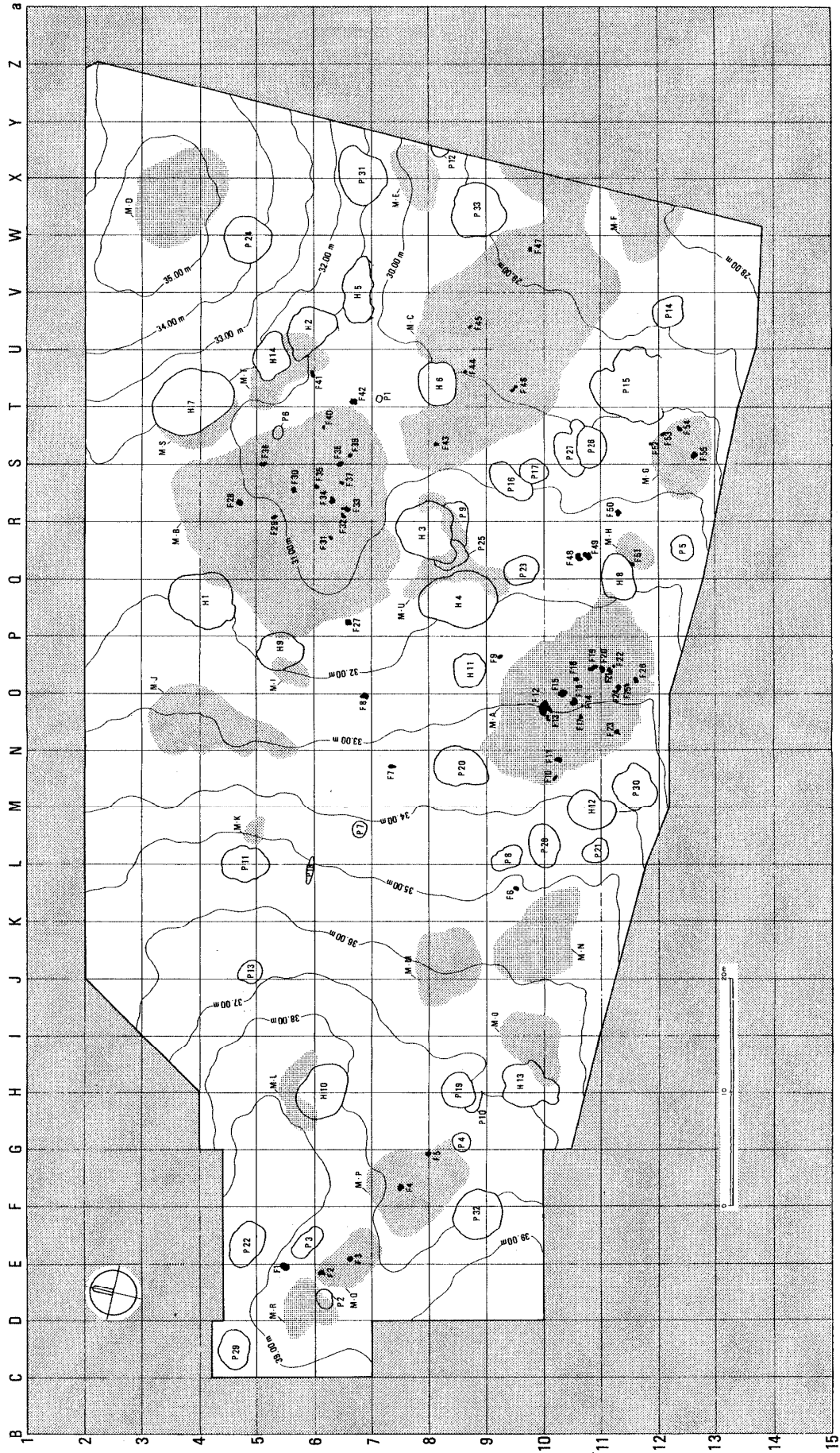


図3 大楽毛1遺跡遺構配置図（松田猛・石川朗2001『釧路市大楽毛1遺跡発掘調査報告書Ⅰ』より）

※Hは住居跡、Pは土坑、Mは盛土、Fは焼土を示す

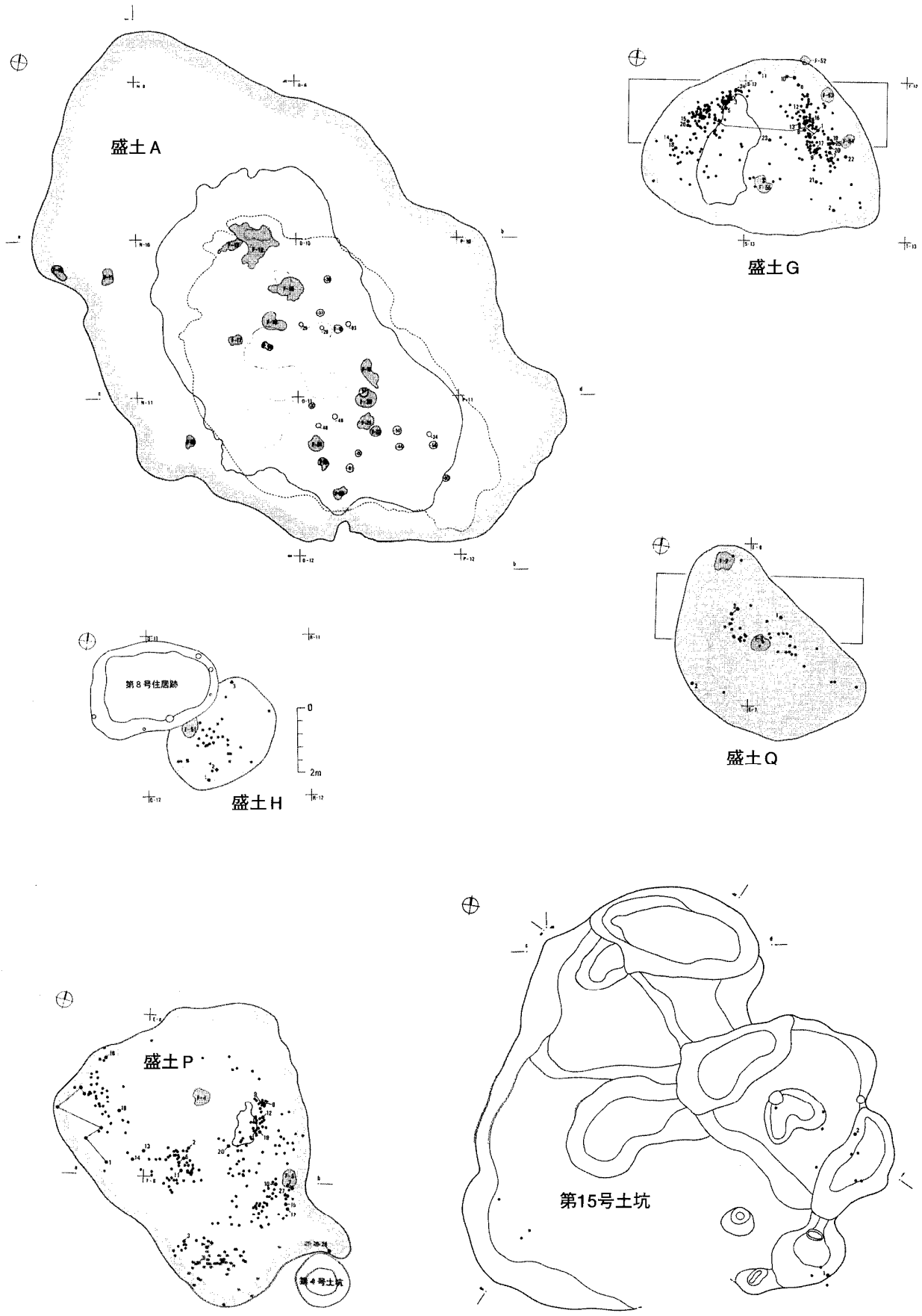


図4 大楽毛1遺跡 盛土遺構および盛土供給土坑